

【イスラエル】

孤立した社会から 生み出される自己省察

田浪亜央江

孤独な人間像を生み出す〈政治〉

映画を通してイスラエルという国やその社会を「知る」ということに寄与するために、どういう作品を紹介したらいいだろうか。世界各地出身の移民によって構成され、政治的にも文化的にも宗教に対する立場も極端に多様で、バラバラな国。かといって、エスニシティや文化の多様性に配慮してバランス良く作品を寄せ集めて紹介すれば目的を果たせるとも思えない。また、パレスチナ人を難民化しながら建国を実現し、戦争と占領を続けてきたこの国のなか

から生み出される映画や文学をどんなふうに紹介しようと、何らかの政治性は必ず帯びる。映画や文学作品などを通じてイスラエルという国を「紹介する」ことの意味は意外とやっかいであり、筆者にはやや肩の荷が重い作業だ。

と、冒頭から重くなってしまった気分をほぐすために、まずは〈政治〉とは無縁の装いをした、都市テルアビブの中でゆるゆるとした日常が織られてゆく作品『ジェリーフィッシュ』あたりから紹介したい。恋人と別れたばかりのパディアのもとに突然現れた五歳の少女。パディアがウェイトレスとして働く結婚式場で式を挙げたばかりの新婚カップルの不運、そしてイスラエルに來たばかりのフィリピン人のメイドとその雇用者家族のなかのすれ違い。海に漂うクラゲそのままに、この三つの物語は方向も目指す着地点も見えないまま、互いにほとんど接点をもたずに進んでゆく。

親に十分に愛されなかった子ども時代の記憶を引きずっているパディアほか、登場人物たちは皆、孤独と満たされなさを抱えている。どの社会にも「孤独」があるが、その背景を探るなら、社会環境と何らかの関わりがあるはずだ。だからこそパディアの孤独や足場のなさは、筆者には周辺地域から孤立して存在するイスラエル社会のありようと、どこかでつながって見えてくるのだ。

孤独なイスラエル社会。この点に関して強く印象づけら



写真1 タウフィークとディナ（『迷子の警察音楽隊』の一場面）

れたのが『迷子の警察音楽隊』だ（写真1）。文化交流のためにイスラエルに招かれたが乗るバスを間違え、ペタハ・テイクヴァならぬベイト・ハテイクヴァなる辺境の町に到着したエジプトの音楽隊の一夜を描いた作品である。エジプト人がイスラエルで繰り広げる珍妙な騒動を描いたコメディが想像されるところだろうが、警察の音楽隊員だ

ということもあり、ひじょうに真面目な人々として描かれている。特に指揮者のタウフィークは、奔放だがさつなイスラエル人を前に戸惑いながらも丁寧で古風な英語しか話せない不器用な中年男性で、早くに息子と妻を亡くした悲しみを背負った人物である。

音楽隊員を泊めることにしたディナも、魅力的でまだ若い女性だが家庭生活には恵まれず、一人暮らしをしている。ベイト・ハテイクヴァは文化的なものとは無縁な寂しい町で、人々は「石器時代」のように干からびた生活をしている。文化のない町に住む住人と、エジプト音楽というオーセンティックなアラブ文化を背負った音楽隊員たち。

作品中では特に言及されないが、舞台は明らかにミズラヒーム（東方系ユダヤ人）社会で、ダイナを演じる女優はモロッコ系ユダヤ人である。単に辺境の町で暮らしているから寂しいのではなく、親の代にイスラエルに移民してきて、彼らの出自であるアラブ文化から切り離されてしまっているがゆえの孤独ではないか。一方で両者のあいだに交流の回路が生まれるのも、彼らの共通項が〈孤独〉であるからだ。エジプト人音楽隊員たちがやや不自然なまでに孤独を抱えた人々として描かれているからこそ成立したコミュニケーションのように思う。

周辺地域のなかで孤立するイスラエルと、その国と和平条約を結んだがためにアラブ諸国のなかで孤立したエジプ

ト。キャンペーンヴィット合意三〇周年の前年に作られたこの作品は、見かけ通りの単なるヒューマンドラマとしては、とても観られない。

イスラエル社会のなかの〈占領地〉

さて、直接〈政治〉を描かない上記作品と異なり、占領地に反対するという政治的な活動を行っているにもかかわらず「政治とは無縁」であろうと努力し、そうすることで互いのプライベートルームな関係を必至で守ろうとする登場人物たちを描いているのが『バブル』である(写真2)。友だちどうしの二人のゲイ男性と一人の女性という、テルアビブに住むルームメイト三人組は、左派の活動家でもある。そのうちの一人であるノアムは、占領地に配備されたパレスチナ人のアシュラフと予備役中に出会い、恋人どうしとなる。ヘブライ語を完璧に話せるアシュラフはテルアビブのカフェで働き出すが、パレスチナ人であることが知られて姿を消す。ノアムはアシュラフを追って占領地に入ると、アシュラフの姉の婚約者に二人の関係(ゲイであること)を知られてしまう。

シオニストの左派であり性的にもオープンな人々のコミュニティの雰囲気、この作品では巧みに切り取られている。登場人物たち、とりわけ危うい局面をユーモアで切り抜ける三人組の機転や堂々とした態度は清々しい。さま



写真2 『バブル』DVD ジャケット

ざまな問題を生み出しているイスラエル国家のなかにこうした魅力あるコミュニティが確かに存在することは、何度でも確認しておきたいと思う(なお、「バブル(泡)」とはテルアビブのニックネームとのこと)。

しかし、ノアムが恋人とするのがイスラエルに住むアラブ人ではなく、家族とともに西岸地区に暮らすパレスチナ

人であるという設定には違和感がある。いくら性的指向が一致していても、検問所で出会ったパレスチナ人とイスラエル兵が直後から愛し合い始めるという展開には無理があるだろう。テルアビブの三人組は大変魅力的かつ自然に描かれている一方で、アシュラフやパレスチナ社会の登場人物の人物像は類型的で、行動も説得力に欠けるのだ。こうした欠陥自体が、占領に反対しつつもパレスチナ人と直接関わることのほとんどないシオニスト左派の人々による表現の限界を示しているのだろうし、イスラエル社会をありのままに理解したい者にとっては、それを含めて興味深い作品なのである。

本作で描かれるように、テルアビブは一見、さまざまな性的指向や文化、政治的背景の人々がそれぞれのあり方で暮らせる町だ。だが、この街の片隅には、町の正式なメンバーにはなりえない人々が、差別と占領の影を抱えて生きている。ドキュメンタリー作品『ガーデン』は、テルアビブの「ハシムラル公園」一帯で売春をして生活をする二人の少年を、三年間にわたって取材して作られた作品だ。

ヘブロン出身のニノとイスラエル出身のアラブ人ドゥドゥは乱暴な言葉を投げ合いながらも互いに深く愛し合う友だちで、生活を変えようと互いにもがき続けている。二人の境遇や生き様は観ていて息苦しくなるほどだが、ニノが少年院に送られ小さな展望を見出すことで、観る者も少

しだけ救われる。

最近では、ユダヤ人とアラブ人の監督による共同制作で、テルアビブの後背地ジャッファにあるアジャミー地区を舞台にした『アジャミー』が大きな話題となった。こちらにはさまざまなプロットを織り交ぜたフィクションだが、犯罪や暴力が横行するアラブ社会と、麻薬を取り締まるユダヤ人警部たちの動きが基調となっている。暴力も麻薬もイスラエル社会の至るところに存在するのには、アジャミーのアラブ社会に焦点が当たると、たちまちイスラエルのなかの「異質な社会」の物語として消費されてしまう。そうした問題点を考えると、対象に丁寧に寄り添って作られた前述のドキュメンタリー『ガーデン』も、製作者たちの意図とは別の効果を生み出してしまっている可能性があることに気がつく。

イスラエル国家の起源

ここで、この国のこうしたありようをストレートに問うている作品を紹介したい。この国の現状を問うことはこの国の起源を問うことであり、その記憶を掘り起こすこと抜きにはありえない。特にドキュメンタリーのなかにはその作業に貢献してきた作品が多いが、巨匠アモス・ギタイの『家』およびその一八年後の続編『エルサレムの家』は、ただ一つの〈場所〉からイスラエルの建国の起源を問う手

法が印象的だ。一九四八年までパレスチナ人のダジャダーニ一家に属していた西エルサレムの家が、一九五〇年代にイスラエル政府によって「不在者財産」として接収され、ユダヤ人移民向けに「レントル」された後、ユダヤ人の新たな所有者の手で改修される。作品はかつてこの家に住んでいた医師とその家族、現在の住人、隣人たち、改修工事に携わるアラブ人建築労働者などの語りで構成され、ひとつの場所の来歴を掘り下げてゆく。声高に俯瞰的に歴史を語りながら、実は自らの見たいものしか見ていないドキュメンタリーがイスラエルには多いが、本作はカメラの位置をほとんど数メートル以内に置いて静かな語りを紡ぎ出しながら、歴史に対する個人の姿勢や生き方をえぐる作品になっている。

それとは全く異なる手法で作られた『ジャッファ オレンジの規則労働』も面白い。オレンジと言えば、オリーブやレモンと並んでパレスチナの代表的な農産物であり、パレスチナ人作家カナーフアーニの短編小説『悲しいオレンジの実る土地』がすぐに思い出される。またその視覚的な美しさもあり、パレスチナ映画ではパレスチナの光景を描くのにオレンジの森が効果的に使われてきた（たとえば『三つの宝石の物語』など）。他方、イスラエル建国後はイスラエルの代表的な農産物となり、同時に新しい国家とその国民の健康的で力強いイメージを代表してきた。

オレンジの栽培は、遅くとも一九世紀初頭にはパレスチナで始まったという。映画はイスラエル建国以前のオレンジ栽培・収穫・出荷といったすべての作業におけるアラブ人とユダヤ人の共同労働について、豊かな視覚的イメージと証言を提供してくれる。だが一九四八年のナクバ[＊]によってアラブ人は追い出され、オレンジの主要な産地ジャッファは、ユダヤ人の町テルアビブの一部として吸収される。同時にパレスチナの民族運動の発展のなかで、オレンジの表象がいかに多用されているのかも気づかされる。だが、二つの異なる歴史観やイメージを単純に対置しているのではない。オレンジをめぐる豊かな記憶を前に求められるのは、「パレスチナ人の民族的権利を認めた上で、イスラエルの存在の再定義」なのである。

ラスト近くでは占領への抵抗手段としての「イスラエル製品ボイコット」キャンペーン用のデザインに使われているオレンジまで登場して、ドキリとさせられる。ボイコットはイスラエルで制作された映画も対象となるから、これは監督エイアル・シヴァンの自己省察でもあるだろう。同時に思い至るのは、良質なイスラエル映画であっても、アラブ諸国ではボイコットのためにほとんど観る機会がない状況のなかで、私たちがそれを観ているという事実だ。

私たちは、イスラエル映画を観ること、イスラエルに関心をもつことによって、いかなる問いを自らに発するべき

なのか。私たち自身に問いが向けられることがないまま観終えてしまつてはならないイスラエル映画は意外に多い。

●注

*1 ベタハ・テイクヴァ（「希望の始まり」の意）はテルアビブ近郊に実在するイスラエルの町。ベイト・ハテイクヴァ（「希望の家」）はそれらしい地名だが実在しない。アラビア語はP音を持たず、PとBの区別ができないことから間違いが生じたことが観ている者にはすぐわかるようになっていく。これは、アラブ人に対する揶揄としてイスラエルのメディアだけでなくアラブ世界との文化交流が描かれる場面で多用され陳腐にもなっているが、それでもなおよく登場する。

*2 「大災厄」。パレスチナの地にユダヤ国家が建国される際にユダヤ軍が実行した軍事作戦により、先住民であるアラブ（パレスチナ）人のほとんどが難民化し、パレスチナ社会が崩壊した出来事。

●参考文献

白杵陽（一九九八）『見えざるユダヤ人——イスラエルの〈東洋〉』平凡社。

白杵陽（二〇〇九）『イスラエル』岩波新書。

栗谷川福子（二〇〇二）『イスラエル——ありのままの姿』岩波現代文庫。

立山良司（編）（二〇一〇）『イスラエルを知るための六〇章』明石書店。

田浪亜央江（二〇〇八）『〈不在者〉たちのイスラエル——占領

文化とパレスチナ』インパクト出版会。

映画リスト

『アジャマー』……① *أجّام* / *ajjam* / *ajam* / Ajami ② スカンダル・コブティ、ヤロン・シヤニ、③ 二〇〇九年、④ イスラエル、⑤ アラビア語、ヘブライ語、⑥ 未公開。

『家』……① *בית* (Bait) / House ② アモス・ギタイ、③ 一九八〇年、④ イスラエル、⑤ ヘブライ語、アラビア語、英語、⑥ アテネ・フランセ文化センターで特集上映（二〇〇九）。

『エルサレムの家』……① *ביתנו בירושלים* (Bait be Yerushalym) / A House in Jerusalem ② アモス・ギタイ、③ 一九九八年、④ イスラエル、フランス、⑤ ヘブライ語、アラビア語、英語、フランス語、⑥ アテネ・フランセ文化センターで特集上映（二〇〇九）。

『ガーデン』……① *גן* (Gan) / Garden ② ルーシー・シャツ、アディ・パラシユ、③ 二〇〇三年、④ イスラエル、⑤ ヘブライ語、アラビア語、⑥ 山形国際ドキュメンタリー映画祭（二〇〇五）。

『ジャッファ オレンジの規則労働』……① *Jaffa: The Orange's Clockwork* ② エイアル・シヴァン、③ 二〇〇四年、④ イスラエル、⑤ ヘブライ語、アラビア語、英語、フランス語、⑥ 未公開。

『ジェリーフィッシュ』……① *meduzot* (Meduzot) / Jellyfish ② エドガー・ケレット、シーラ・ゲフェン、③ 二〇〇七年、④ イスラエル、フランス、⑤ ヘブライ語、英語、タガログ語、⑥ 劇場公開（二〇〇八）、DVD販売。

『バブル』……① חבלי (Ha-Buah) / 'The Bubble' ② エイタン・フォックス、③二〇〇六年、④イスラエル、⑤ヘブライ語、アラビア語、⑥未公開。

『迷子の警察音楽隊』……① מיקור תבואה (Bikur Ha-Tizmorel) / 'The Bands Visit' ② ハン・コリン、③二〇〇七年、④イスラエル、フランス、アメリカ合衆国、⑤アラビア語、英語、ヘブライ語、⑥東京国際映画祭(二〇〇七)、DVD発売。

『三つの宝石の物語』……① סיפורי הלוויתן (Hikayatu Jawahin thalath) / 'Tale of the Three Jewels' ② シェル・クレイフィ、③一九九四年、④パレスチナ、ベルギー、イギリス、スペイン、⑤アラビア語、⑥東京国際映画祭(一九九五)、NHK衛星放送および教育テレビで放映。

著者紹介

- ①氏名……田浪亜央江(たなみ・あおえ)。
②所属・職名……成蹊大学ほか非常勤講師。
③生年・出身地……一九七〇年、東京都生まれ。
④専門分野・地域……パレスチナ／イスラエル地域研究。
⑤学歴……東京外国語大学外国語学部アラビア語学科、一橋大学言語社会研究科・修士課程(言語社会専攻)、一橋大学言語社会研究科・博士課程(言語社会専攻)単位修得退学。
⑥職歴……国際交流基金中東専門員(三六歳、任期三年)。
⑦現地滞在経験……シリア(ダマスカス大学文学部・聴講生、一八か月、二三歳)、イスラエル(ハイファ大学・研究生、三二歳、二年間)。

⑧研究手法……パレスチナ／イスラエルで出会う人たちは「自分の声を聞いて欲しい」と思っている人たちばかりなのでインタビューはしやすいが、聞こえてこない声のありかを探すための情報収集には時間がかかる。

⑨所属学会……日本中東学会。

⑩研究上の画期……占領とそれに対する抵抗運動という構図の原因と結果を逆転させ、テロリズムとそれに対する治安対策であるという主張に力を与えたという意味で、二〇〇一年の「九・一一」事件。「テロ対策」とか「対テロ作戦」という言葉の認知度が急上昇し、イスラエルは言葉の選び方に神経を使わなくなった。他方、パレスチナ人にとっては、単純な一言にも「我々はテロリストではない」という前置きが必要となり、それが彼らの発言行為の足を引っ張るようになった。

⑪推薦図書……板垣雄三『歴史の現在と地域学』(岩波書店、一九九二年)。

⑫推薦する映画作品……『炎のアンダルシア』(ユーセフ・シャヒーン監督、一九九七年、エジプト)。